

第132回

自作自演ブームに 拍車を掛けた人たち

シンガーソングライター

昭和41年の歌謡界に新風を吹き込んだのは、專業歌手ではなく映画俳優・加山雄三でした。『君といつまでも』に続き、昭和41年4月にはエレキギターをフィーチャーした、両A面扱いのバンド演奏もの『蒼い星くず』（演奏・ブルージーンズ）『夕陽は赤く』（同・ランチャーズ）を発売、東宝映画『エレキの若大将』『アルプスの若大将』『歌う若大将』との相乗効果で、バンドスタイルで歌うことのかっこよさを見せつけてくれました。

同年2月発売のザ・スパイダース『ノー・ノー・ボーイ』、3月発売のブルー・コメッツ『青い瞳（英語盤）』、この2枚のシングル盤と若大将ソングという下地に新種が集まり、翌年のGSブームへと結実していきます。既存の青春歌謡にはなかった、エレキサウンド、バンド形式、そして自作自演——若者たちを夢中にさせる要因が揃っていました。

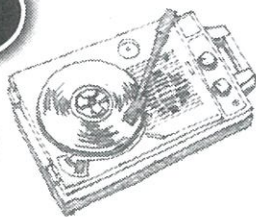
同年夏から翌42年春にかけて発売された、私のお気に入りシングル盤

を列挙してみます。
・荒木一郎『空に星があるように』
・西郷輝彦『傷だらけの天使』

名曲カルテ

昭和歌謡と いつまでも

堀井六郎
絵・松本浦

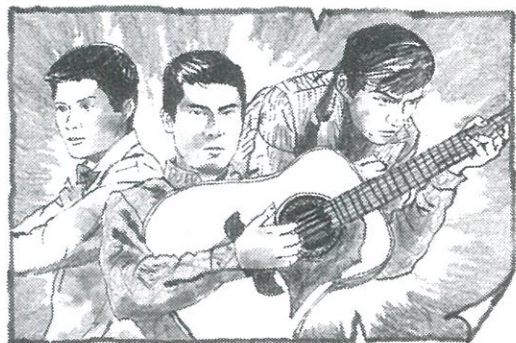


- ・大木賢『これが愛さ』
- ・加山雄三『夜空を仰いで』
- ・市川染五郎（現・松本白鸚）『野バラ咲く路』

・バーブ佐竹『星が云ったよ』
これらの盤には共通項があります。染五郎のB面を除いて両面全曲が歌手自身による作品で、シンガーソングライターという呼称もない時代、希少な自作自演の曲でした。

西郷主演で映画化もされた『傷だらけの天使』は、尾藤イサオの『悲しき願い』やブルコメの『青い瞳』を思わせるエレキ歌謡で、洋楽志向の西郷の魅力が堪能できます。「作詞・我修院建吾、作曲・銀川晶子（A面共）」というのは両名とも西郷の筆名です。

台詞が入る『星が云ったよ』（詞・長澤ロー）の作曲者、シナ・トラオは、フランク・シナトラをもじったバーブの筆名です。加山と同じ二世俳優だった荒木一郎と市川染五郎は、そのまま作詞作曲家として記載されています。



「これがー愛さー、愛なんだよー」と絶叫一步手前で熱唱する大木賢の『これが愛さ』は一時期、ラジオのスポット広告で頻りに流れていたもので、少しは知られている曲ですが、作詞作曲者は「金野孝」、大木の本名が記されています。サビの部分で台詞も泣かせます。

——あの日から消えないんだ 君のすべてが “一生愛しちゃうよ” っ
て言ってもいいくらいなんだ 本当だよ この気持 だから ふたりの心で愛の紅バラを いつまでも育てて行こうネ

自作自演、3連リズムの曲調、『恋は紅いバラ』を想起させる台詞入りなど、若大将ソングを踏襲したものでしたが大ヒットに至らず、その後も歌手としては大成しませんでした。やがて作曲家・浜圭介として捲土重来、『終着駅』『そして、神戸』など、昭和歌謡を代表する名曲を量産してくれました。
ビートルズと若大将の自作自演スタイルはバンド音楽を普及させ、その流れはGS、カレッジフォークへと広がりました。